

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
大学院生研究 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	福山 清蔵
研究課題名	韓国の家族同居高齢者の孤独感－高齢者の社会参加と家族の支援－	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学 研究科・ コミュニティ福祉学 専攻・ 前期2年	元 壽敏(ワン スミン)
研究期間	2011 年度	
研究経費	100 千円	

<p>研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)</p> <p>本調査は、韓国の家族同居高齢者の孤独感について、「高齢者の社会参加と家族の支援」というテーマで、韓国と日本の高齢者福祉センターに通う高齢者の意見をアンケート調査により実施した。そのため、「高齢者の社会参加と家族の支援」に使う質問紙を作るため、韓国と日本で2回のプレ調査を行った。</p> <p>韓国の文献にあたり、質問項目を選択して韓国と日本でプレ調査に取り組んだ。プレ調査は2回行い、項目内容の検討・精査の結果、妥当性のある質問紙を作成することができた。また、実施に当たっての留意点を明確にすることができた。</p>
---

<p>キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)</p> <p>{ 高齢者 } { 家族 } { 孤独感 }</p>
--

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

- 研究方法

1) 文献研究—日本と韓国の高齢者の孤独感に関して文献研究を行う

2) 調査(プレ調査)

—韓国：1回目のプレ調査 - バンポザイ高齢者福祉センター(質問紙調査)18 ケース

1. 調査地域：韓国・ソウル・バンポザイ敬老福祉センター
2. 調査対象：65歳以上の家族同居高齢者18名
3. 調査項目：家族同居高齢者の孤独感について  
(構成：UCLA孤独感尺度(韓国語版)20項目、家族との関係を知るための10項目、フェースシート1枚9項目)
4. 調査方法：1対1で高齢者の意見をアンケート用紙に調査員が書き込む
5. 調査期間：2011年8月29日～2011年9月2日(5日間)
6. 回収状況：100%

—日本：2回目のプレ調査板橋区仲町ふれあい館(質問紙調査)

1. 調査地域：日本・東京都・板橋区立仲町ふれあい館
2. 調査対象：65歳以上の家族同居高齢者20名
3. 調査項目：家族同居高齢者の孤独感について  
(構成：UCLA孤独感尺度(韓国語版)20項目、家族との関係を知るための5項目、フェースシート1枚4項目)
4. 調査方法：高齢者の意見をアンケート用紙に自分で記入(自筆式)
5. 調査期間：2012年1月12日～2012年1月12日(1日間)
6. 回収状況：100%

- 結果

「高齢者の社会参加と家族の支援」の質問紙の構成を作成するため、日本と韓国で総2回のプレ調査を行った。韓国での1回目のプレ調査を行う過程でいくつかの問題点が発見され、日本での2回目のプレ調査で、改善を行った。その結果、調査の課題がより明確になった。

韓国での1回目のプレ調査の結果からは、改訂版UCLA孤独感尺度(韓国語版)の結果、被験者18名の孤独感得点の平均値は33.77、標準偏差は12.51であり、全体的な孤独感得点は低い傾向にあった。基本的属性及び個人的特性と孤独感の関連を検討するために、まず、基本的属性と孤独感との関連を見た。基本的属性には、年齢、性別、現在の家族構成・人数、若い家族構成・人数、家族内の仕事、現在の交友人数、社会活動がある。ここからは、60代の年齢で、現在の家族構成員数が少ないほど孤独感が高いことが示唆された。年齢、現在の家族構成員数以外の基本的属性からは関連がみられなかった。

家族との関係を知るための10項目と孤独感の関連を検討するために、まず、現在の家族との関係を聞く10項目と孤独感得点との相関係数をそれぞれ算出したところ、項目の中の5項目から優位な相関がみられた。このことから、量的指標で示される家族との関係は、高齢者の孤独感に対して関連を持っていることが示唆された。すなわち、家族との関係が円満であるほど孤独感が低いことが示唆された。

日本での2回目のプレ調査の結果からは、被験者20名に対して、平均得点43.5、標準偏差6.36、得点範囲26-35点であった。全体的な孤独感得点は、低い傾向であった。孤独感得点の平均値は43.5、標準偏差は6.36であり、全体的な孤独感得点は低い傾向にあった。基本的属性及び個人的特性と孤独感の関連を検討するために、まず、基本的属性と孤独感との関連を見た。基本的属性は、性別、年齢、家族構成員数、社会活動がある。ここからは、社会活動があつて低年齢であるほど孤独感が低いことが示唆された。性別及び年齢、家族構成との関連は見られなかった。

1回目のプレ調査で家族との関係を知るための10項目で最も孤独感との関連が深かった5項目を検出して2回目のプレ調査を行った。その結果、家族との関係が高齢者の孤独感に関連があると示唆された。家族との関係が円満であるほど、孤独感が低いことが示唆された。

## 研究成果の概要 つづき

## - 考察

韓国の1回目のプレ調査を行って①調査地域設定と②調査方法、③質問紙に改善点が求められた。

まず、①調査地域設定では、本調査を行った場所がマンション団地で運営するデイケアセンターであり、ある程度裕福な高齢者が多かったため高齢者の幸福度も高かった。また、同じ団地住まいの高齢者が周囲にいたため、自分の家族は幸せという見栄を張る回答も多かった。そのため、地域設定を、比較的安い区役所や市庁などで運営する高齢者福祉センターにすることが挙げられた。

次に、②調査方法では、高齢者の本音を導き出せなかった。それは、初対面の人に心を開くことへの抵抗があり、そのため、調査対象とより多くのかかわりを持ちながら話を導き出すことが必要であった。

最後に、③質問紙では、質問項目とフェースシートの質問項目が多く、調査時間が長かったため、調査対象者が調査途中で疲れてしまうことがあった。そのため、質問項目を減らすことが挙げられた。

日本の2回目のプレ調査では、以上の三つの改善点を基に、調査を行った。

まず、①調査地域設定では、区で運営する高齢者福祉センターに伺った。団地内とは違って、様々な住居形態に住む高齢者がいた。次に、②調査方法では、初対面の高齢者さんが抵抗感を少なくするために、館長と共に調査を進めた。その結果、普段思っていることなど高齢者の話を進めやすかった。最後に、③質問紙では、家族との関係を知るための10項目を孤独感尺度との相関が少ない5項目を減らして5項目になった。また、フェースシートの9項目も孤独感との相関が少ない5項目を減らして4項目になった。前回のプレ調査とは違って、調査時間が短縮されたため、高齢者が途中で疲れてしまうことはなかった。

日本と韓国での総2回のプレ調査の結果、質問紙の構成はUCLA孤独感尺度(韓国語版)20項目、家族との関係を知るための5項目、フェースシート1枚4項目となった。2回のプレ調査からは、家族関係が円満であるほど孤独感が低く、家族関係と高齢者の孤独感に関連があることが分かった。

## - まとめ

韓国と日本での2回のプレ調査を行って、家族同居高齢者の孤独感に関して「高齢者の社会参加と家族の支持」のアンケート調査紙の構成を作成することができた。調査結果からは、2回のプレ調査からは、家族関係が円満であるほど孤独感が低く、家族関係と高齢者の孤独感に関連があることが分かった。

## - 参考文献

加藤千恵子・石村卓夫 2003『Excelで優しく学ぶアンケート処理』東京図書

堀 洋道 2000『心理尺度ファイル：人と社会を測る』垣内出版株式会社

梶原杏奈・牧 正興 2008「家族同居高齢者の孤独感に関する研究」福岡女子学院大学大学院紀要：臨床心理学 5

青木 邦男 2001「在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因：地方都市の調査研究から」社会福祉学 42(1)

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

(様式3)